第１回愛知県環境教育等推進協議会会議録

１ 日時

令和２年９月２日（水）午前 10 時から 11 時 30 分まで

２ 場所

あいち環境学習プラザ　第１会議室

３ 出席者

委員 16 名

４ 傍聴人

なし

５ 会議の概要

（１）開会

（２）あいさつ

岡田委員

（３）議事

ア　愛知県環境学習等行動計画 2030 の推進について

・各主体の環境学習等に関する取組状況について

事務局から資料 1 に基づき愛知県環境学習等行動計画 2030 の推進について説明。

事務局から資料 2-1 に基づき環境学習等に関する取組について説明。

各委員から資料 2-2～2-5 に基づき取組について説明。

・計画の進捗状況の評価方法について

事務局から資料 3 に基づき計画の進捗状況の評価方法について説明。

イ　その他

・事務局から AEL ネット環境学習スタンプラリーについて報告。

【質疑応答・要旨】

（新海委員）

事業を実施し、「ねらい」がどのように達成されたのかどうかが評価指標になると考えるが、ねらいに対する達成度をはかる項目の記載が資料に見られない。

また、記述しているねらいの達成には、この事業だけで達成するには非常に難しいものがあり、この事業でそこまでのねらいが必要なのかと感じるものがある。また必要ならば、ねらいを達成するために、事業がどう実施され、

そのことによりどのような変化や効果をもたらしたのかを明示し、ねらいに対する達成度について記載するべきではないかと考える。

（篠田委員）
　幼児期における自然体験型による環境教育は、環境や気候の変化に気づくことのできる感性を養うことが目的である。それは、環境や気候の変化に気づく感性がなければ、環境を良くしようという方向に動けないからである。「何のために」という目的をはっきりと認識し、適切に設定することが非常に大切である。

（鈴木委員）
　プログラム直後では確認ができない「行動」の部分に関して、アンケートを改めて実施し、学習者の長期的な変容を把握する取組はとても良いことだと思う。資料３については、「ねらい」と「この事例に関連する主なSDGs」と「成果と課題」と「学習者の変容」が合う形で記載されるとよい。

（千頭会長）
　学校における教育と、もりの学舎のような場所での社会における教育と、家庭内での会話から生まれるような教育がバランスよくつながるとよい。

（早川委員）
　例えば幼児期に「もりの学舎」で学んだ子ども達が、その後の県事業にどの程度参加しているかなどの連続的な後追い調査があると、連続的な学びが定量化できるのでよいのではないかと感じた。

（篠田委員）
　教育は、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、大学とステップを踏んでいけるような形が構築されている。一方、環境教育は、そのようなシステムの構築がまだできていない。そのようなシステムを構築する時期に来ていると感じる。

（大鹿委員）
　「質的な評価」というものは、やはり非常に難しく、量や数でないので感覚的なものにならざるを得ないが、文字や絵で表現したり、様々な分析を駆使したりするなどして、できる限り客観的に評価できるようにしなければならない。

（新海委員）
　ねらいの立て方、言い換えれば評価軸の立て方が一番大切である。何の

ために事業を実施し、どのような事業を実施し、その成果と効果がどうであったのかというプロセスがないと主観的な評価になってしまう。評価にあたり、チーム体制をとるなど、複数名で議論できるとよい。

（堀尾委員）

春日井市においては、市民が「つながり」と「広がり」を持てるよう各種施策を実施しているところである。その評価等について、本協議会での議論を参考としたい。

（鈴木委員）

ねらいを設定するにあたり、「子ども達の各発達段階で５つの力のうちどの力をつけさせたいか」が明確になっているとよりねらいが設定しやすいと感じた。

（千頭会長）

資料３における「ねらい」は「主催者側のねらい」であるが、「参加者側から見たねらい」、言い換えれば「参加しようと思った気持ち」もあわせて把握するとよいと感じた。

（岡田委員）

今回、議事としたアウトカムの評価については、基本的には事務局案として示したワークシートを用いて議論することで共通認識をいただいたと理解している。今後も、中間見直しに向けて様々な意見をいただきたい。

（４）閉会